
Romancing Train

ふたつの灯りが、夜をめぐっています。

幾度もすれ違い、めぐり逢えるのは、つかのま。

光はやがて消え、それぞれの闇へ。

そして、また、めぐる。

はじまりのまえ。

くらやみ。

まっくらで、なにも、見えない。



——切符を、そっと、かざしてみる。

祈るような、思い。

その瞬間、闇に、光が灯る。

こと こと、こと こと。

夜空が、ひらく。
そのまんなかを、ふたつの影が、
ゆっくりと、めぐりはじめる。



とりかこむのは、

瞬いては、ゆらめく灯り。

モノクロームの銀河。

それは、まるで――

からっぽの夜空をめぐる、

ふたつの、メリーゴーランド。

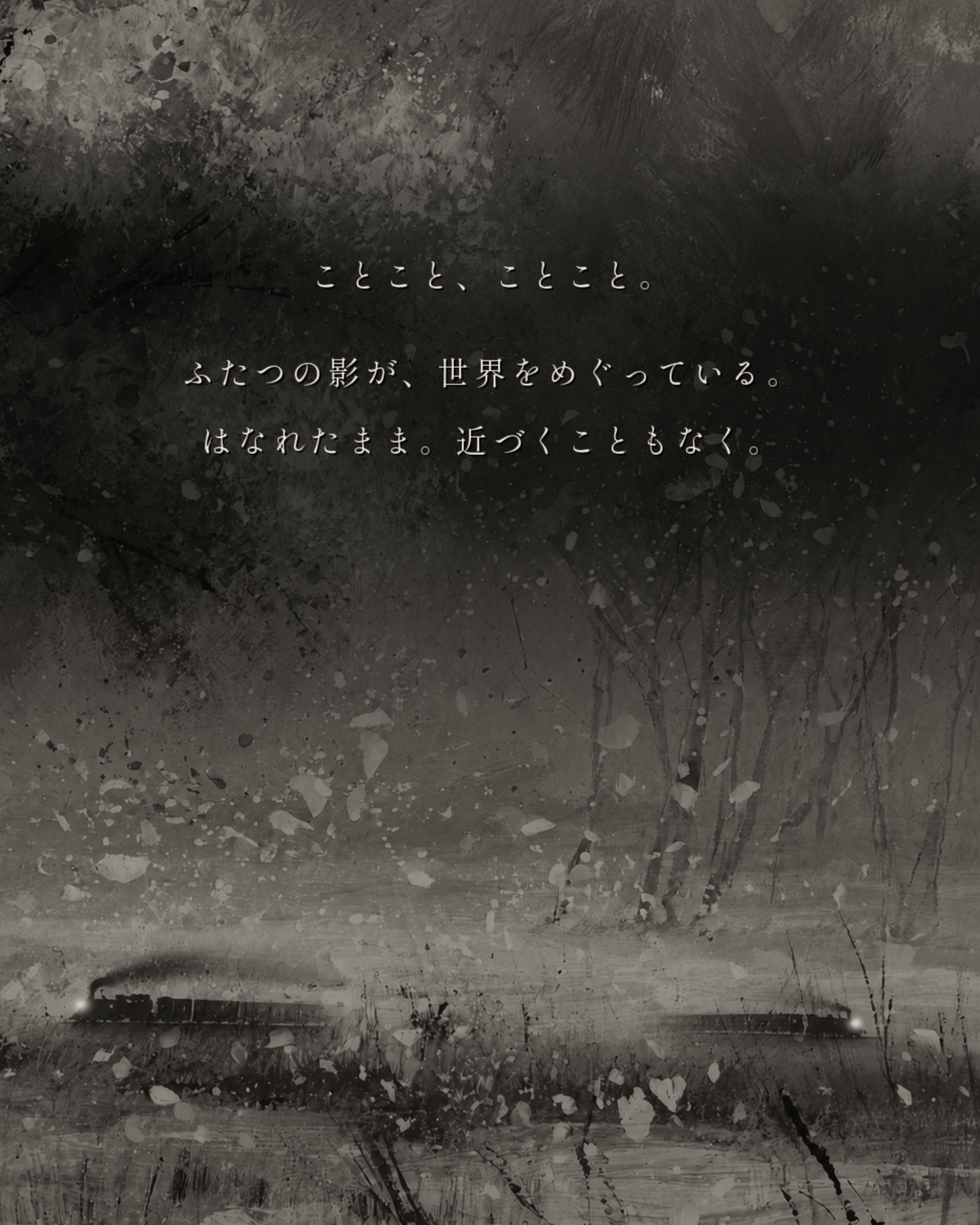
やがて夜空は、

しずかに、降りていく。

ことこと、ことこと。

ふたつの影が、世界をめぐっている。

はなれたまま。近づくこともなく。



こと こと、こと こと。

おなじ軌道を、なんども、めぐる。

それなのに――

景色だけが、すこしずつ、移ろっていく。



景色の奥から、もうひとつの灯りが、

近づいてくる。

こちらへ、まっすぐに。

もう少しで……触れる




——けれど、列車は、曲がってしまう。
背を向けて、奥へ、遠ざかっていく。
そして、もう、いない。

ふたたび、あの灯りが、走ってくる。

けれど今度は、こちらの軌道が、

曲がっていく。



近づいては、すれ違い。

触れそうで、離れていく。



遠ざかる、喪失。

届かない、孤独。

どんなに願っても、

重ならない日々が、あるように。

それでも、巡ることをやめないのは……




いつか、重なり合うと、
信じているから。



とくん、とくん。

なぜか、今夜だけ、胸が、ざわめく。



その瞬間を見守るように――

星たちが、震えるように、瞬きはじめる。

なんども、なんども、めぐりつづけて――

なんども、なんども、めぐりつづけて――

見つめあった、その瞬間――



世界は、色づいた。





まるで、夜のすみずみまで、

にじんでいくように。



だけど、美しい瞬間はもう、
モノクロームに揺れている。

ひとつの影は、端へと

もうひとつの影は、奥へと

それぞれの、くらやみへ。

こと こと、こと こと。

二つの列車は、走り続ける。



同じ夜空。それぞれの軌道。

あたらしい、夜。

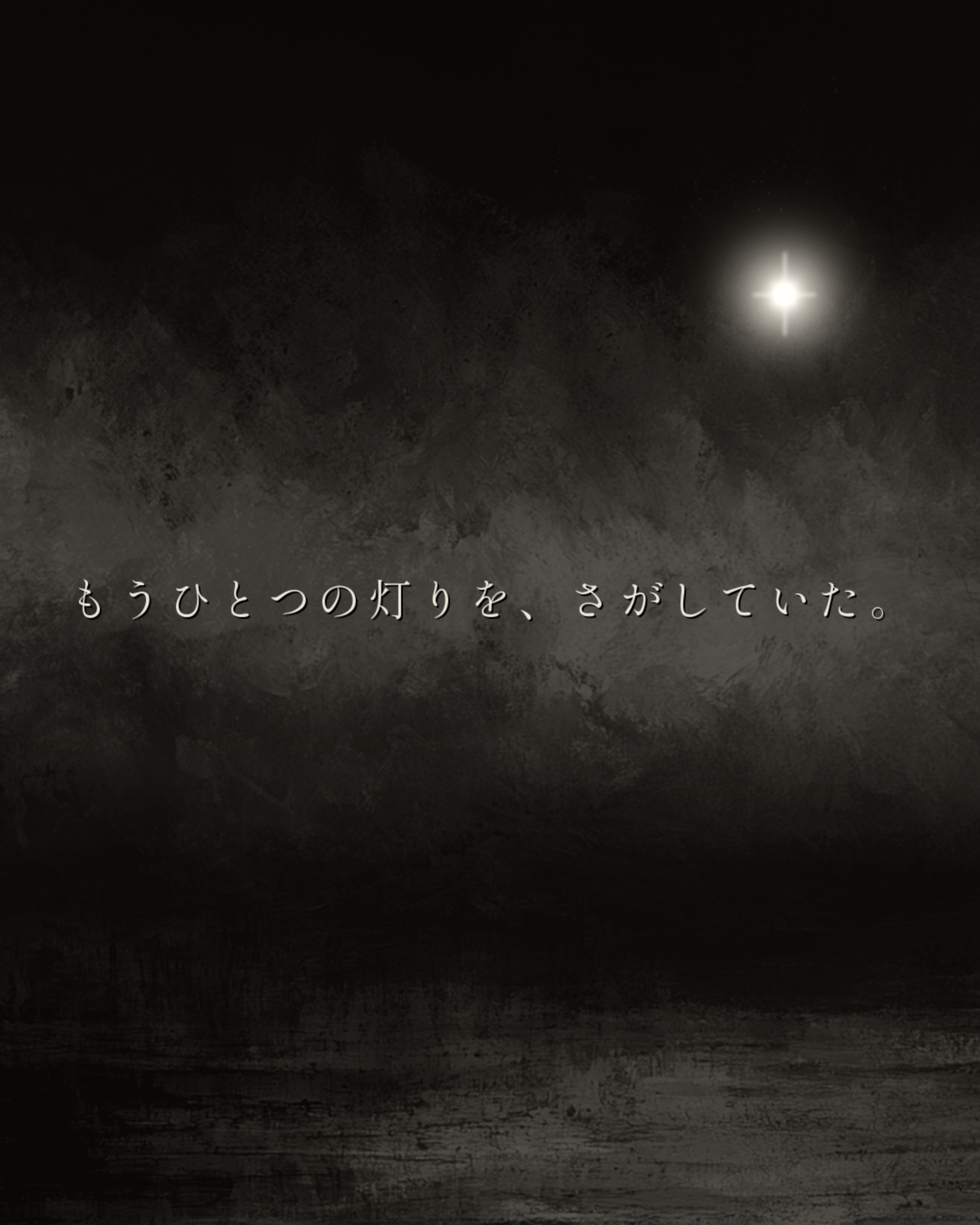


いつか、また、
めぐり逢う時を願いながら。



——列車に、乗っていた。

遠く、遠くを、見つめながら。


もうひとつの灯りを、さがしていた。